

広がれ ひろがれ 心の輪

東京都大田区 あおば生活学校

あおば生活学校は1982年5月にスタートしました。PTA等で知り合った地域の友人、知人、約60名が集まりました。当初は、知識を広めるための学習会の他に手芸などを取り入れて仲間づくりの心掛けました。

「私たちは地域でどのような活動ができるか」を模索していた時、「子どもが子どもを殺す」という衝撃的な事例が神戸でありました。また当時、ニュース等にも取り上げられる子どもの喧嘩が目につくようになりました。

私たちの第一の活動は『地域の子どもたちと仲良しになろう』ということでした。スタートは「子どもの集まる場所に行こう」ということになり、最寄りの児童館に行き

ました。

- ①生活学校の活動を理解していただくこと
- ②私たちの子育ての経験を活かして活動し



クリスマスツリーを作り、子どもたちは好きな飾りつけなどをして楽しんでいる

たい

等を館長や職員たちに伝え、話し合いました。その結果、A児童館に週1回、午後2〜3時間、当校メンバーが2、3人で遊びに行くことになりました。この児童館には毎日、約80名の児童が来ていて、とても賑やかでした。また、中学生男子が4、5人できて、遊具を壊したり、壁にガムをなすりつけたり等の悪さをしていました。私たちは2、3人で中学生の傍に行き、学校のことや世間話をするように心掛けました。中学生たちは「自分たちの来るところではない」と気づいたのか、いつの間にか姿を見せなくなりました。「うるせえババアがいるなあ」と言いつつ、「その眼は嬉しそうでした」と後日館長が教えてくれました。

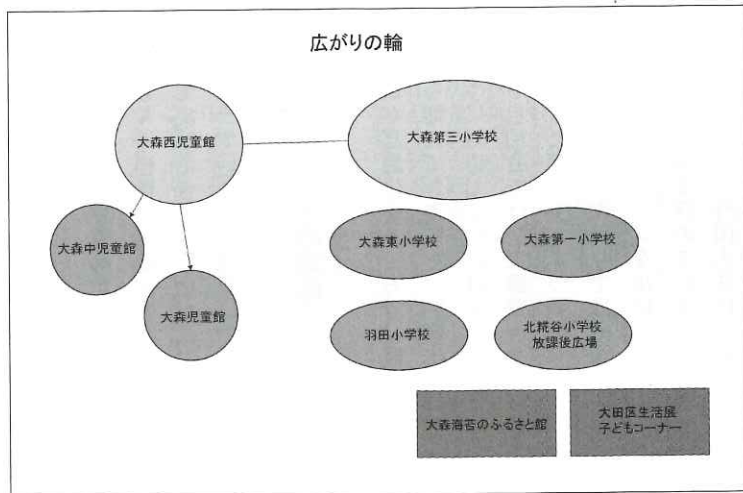




夏休みわくわくスクールで万華鏡作り。遊べるものを自分で作る一に興味があり、真剣に説明を聞いてくる

子どもたちとは園庭で缶蹴りや鬼ごっこ、かくれんぼ等をして遊びました。また、一輪車に乗る子どもの応援をしたり等でした。室内では、子どもの話を聞いたり、描いた絵をほめたり等々。机の下で足をすり寄せた子どもや背中に乗ってくる子どもなどでしたが、そうしたスキンシップを大切にしました。

児童と遊ぶようになって一年を経たころ、「館内が静かになりました」と職員が嬉しそうに言いました。いつの間にか子どもたちが落ち着いて行動するようになっていました。



私たちは特別なことをしたのではなく、自分の子どもを育てた時と同じように、自然な気持ちで児童たちと触れ合っていました。

その後、この活動は波紋のように広がりました。

子どもたちとの触れ合いの中で、嬉しい、楽しいことがたくさんありますが、考えさせられることもあります。「私たち大人が

しつかり生きる」「社会の中でどう生きていくか」等が課題です。

子どもたちからエネルギーをいっぱい受けながら、私たちにできるところまで、この活動を大切にしていきたいです。

「自分でできることを できる時に できるだけする」

当校メンバーの合言葉です。

(あおば生活学校 大木和子)

子どもたちとのふれあいを
大切にするための学習会

- ・戦後の歴史を振り返って、今、大人にできることを考えましょう
— 元小学校教諭 勝田春子氏
- ・子どもと気持ちよくつきあう — 同上
- ・やる気をおこす教育 — 同上
- ・大人が変われば子どもが変わる — 児童館館長 富永福子氏
- ・子どもの育ちを伸ばすには — 立正大学教授 山下富美代氏
- ・子どもにどう接したらよいか — 立正大学教授 山下富美代氏
- ・やさしいまなざしとほほえみを — 児童館館長 五味まゆみ氏
- ・人生は夢があるからおもしろく心があるからあたたかい
— 前小学校校長、東京都教育相談センター相談員 名取博子氏